

穂積陳重『祖先崇拜と日本法』——試訳(2)

Ancestor-Worship and Japanese Law, by Baron Nobushige HOZUMI,

Seven Edition, Revised by Shigeto Hozumi, Tokyo The Hokuseido Press, 1943.

稲 福 日出夫

訳者まえがき

前号(『沖繩法政研究』17号)に引き続き、穂積陳重の英文著書、*Ancestor-Worship and Japanese Law*, by Baron Nobushige HOZUMI, Seven Edition, Revised by Shigeto Hozumi, Tokyo The Hokuseido Press, 1943. の訳を試みた。今回は、そのPART I ANCESTOR-WORSHIP IN GENERAL の部分である。

穂積のこの著が公刊された経緯、また訳出した動機、つまり佐喜眞興英がこの著をしっかりと読み込んでいただろうといった点などについては、前号の訳者まえがきに記した。

邦訳にあたっては、原文とは異なった改行をほどこした箇所がいくつかある。読者にとって、適宜改行したほうが流れを掴みやすいかと思ったからである。また、穂積の原注は各頁の下欄に記されているが、ここでは纏めて、各章の末尾に記した。それで原注の番号と異なり、通し番号となっている。

第1部 祖先崇拜概説

第1章 祖先崇拜の起源

祖先崇拜の起源に関して、これまで多くの著名な研究者や著述家たちによって、それは靈魂に対する恐怖・畏れ (the dread of ghosts) にその端を発するものであり、それゆえ、祖霊に対する供犠・供物 (the sacrifice) は、祖先の靈魂を慰めるために捧げられるものである¹⁾、と説かれてきた。たとえば、エイヴベリー男爵 (Lord Avebury, 1834-1913. 1900年にエイヴベリー男爵となったラボック Sir John Lubbock のことで、イギリスの銀行家、政治家。彼はまた自然科学や人類学、考古学などの分野でも多くの業績を残した。石器時代を旧石器と新石器時代に区分した功績は大きい、といわれている。一訳注) は次のように述べる。「祖先祭祀というのは、靈魂

に対する恐怖・畏れの結果であり、その自然の成り行きである」²⁾。イエーリング (Rudolf von Jhering, 1818-1892. ドイツの法学者。法律解釈に重点を置いた当時の法学界に飽きたらず、独自の法学世界を築いた。『ローマ法の精神』『権利のための闘争』ほか多くの著作を残す。一訳注) は、さらに明白にみずからの見解を表明し、祖先祭祀が親に対する子の孝行に由来するものであるという見方を、強い口調で否定する。イエーリングは、彼の著の英訳本によれば、以下のように述べている。

「世間にひろく流布している見方によれば、死者に捧げる供犠は、子供たちが亡くなった両親に対し深い愛情を抱いていることの証であり、それ故にお供えをするのだ、といわれている。息子たちが、彼等の両親が生存中に、その両親に対してどのように接していたのかということを、我々が知ることも無かったとしたならば、死者への供犠が、亡くなった父祖への愛情から生じたとするこの見解も、或いは認められるかもしれない。しかし、死者に捧げられる供犠とは、つまり、時折、墓前に供えられる僅かばかりの食べ物や飲み物とは、一体何であろうか。両親の生存中、息子の両親に対する接し方、そのような態度を取らざるを得なかった運命 (fate)、また、息子が (意に反して- 訳者補足) 両親をそのように扱うこと、それが法的にも許容されていた運命、そうした運命や宿命といったものを考慮に入れて見比べたとき、一体、この供物とは何であろうか。訳の分からない奇妙な愛情 (a strange love)。実際、その愛情は、両親の死をもって点火される必要があり、また、息子たちは、両親が墓のなかに入ったがために、その両親にパンを差し出すのであって、両親が墓に入る前、つまり生前には、それを与えることを拒むか、或いは、しぶしぶと与えていたのである。そういった何とも奇妙な愛。死んだ両親に捧げられる供物は、決して愛などに因るのではない。まったくその逆で、それは、恐怖 (fear) に因るものである。愛ではなく恐れ戦きが、死者への供犠を促し、駆り立てるのである…。

子孫が先に逝った人々の墓前に食べ物や飲み物を供えることは、子孫たるものの義務である。というのも、もし、子孫がそうした義務を怠ったならば、故人は、復讐をすることになるだろう。つまり、彼等は威嚇する亡霊となって現れ、彼等に対する義務を怠った子孫に対し、あらゆる種類の災いや害悪を

及ぼすことになるだろう。これが、祖霊に供物を捧げる起源であり、元来の動機である。そう私は信じている。すなわち、死者に捧げられる供儀は、決して孝行したいという献身的な心情や愛情から出たものではなく、エゴイズム、つまり恐怖や不安から解き放たれたいという念から生じたものである³⁾。

私は、今紹介し引用したこれらの著者、学者に最大限の敬意を払うことに何ら躊躇するものではない。しかしながら、祖先祭祀の起源を祖霊に対する恐怖や不安にみるといった彼等の見解を受け入れ、それによってみずからを納得させることはどうしてもできない。

むしろ、私は、祖先祭祀の起源を、彼等が考えていることとまったく反対の動機に因ると捉えるほうが正しいように思われてならない。すなわち、その起源は、祖先への愛情であって、決して、祖先に対する恐怖ではない。祖先に対する敬愛の情が、先祖の霊の前で礼拝し、食べ物や飲み物を供える慣習を作り上げていったのである。原始時代、未開社会にあっても、人々は、彼等の両親が生存中はその両親を敬愛していたに違いない。それなのに何故、両親が亡くなると、その霊に対し恐れを抱かざるをえなくなるのか、私には理解できない。また、何故、原始時代や未開社会の人々が、両親の生存中は良心の呵責なしに親を虐待し、両親が亡くなった後は、突然、恐怖に襲われるといったような、先見の明なく浅はかで無思慮な考えで生活できたのか、私にはどうも理解できないのである。

何故、当時の人々は、両親が生存中、無慈悲に虐待などすれば、死後、その両親は亡霊となって虐待した子孫に対し恨みを晴らすことになるだろう、といった不安の念を抱くことがなかったのだろうか。亡霊、死者の霊といったものは、通常、彼等が存命中の記憶をもつものと考えられている。つまり、彼等がこの世にいるあいだに彼等に対して施された恩恵に報い、あるいは邪険にされたことに報復するものだと、信じられていたのである。一体何故、亡霊たちは、この世に生存中に飲み物や食べ物を与えられなかったことに対してではなく、死後において飲食物を供えることを怠っていることに対してのみ、復讐しようと思うのだろうか。生前においてこそ、飲食物の必要性は、確実により大きいはずであり、亡霊となった死後においては、その需要、欲求はおそ

らくかなり低いはずであるだろうに。「何と奇妙な恐怖であることか」—私は、先にイェーリングの表現を引用したが、彼の用語のなかで一語のみを(つまり、loveをfearに-訳者補足) 入れ替えて、あえてここで再掲したい気持ちを禁じ得ない。つまり、「実際、その恐怖は、両親の死をもって点火される必要があり、また、息子たちは、両親が墓のなかに入ったがために、その両親にパンを差し出すのであって、両親が墓に入る前、生前には、それを与えることを拒むか、或いは、しぶしぶと与えていたのである。そういった何とも奇妙な恐怖」。

老人に対し社会がどのように応対しているかということは、或る意味においてその民族がどの程度の文化に達しているかを計る尺度、指針となりうることは事実である。また、老人を敬うという文化は、人類の歴史の過程において、きわめて歩みの遅いものでしかなかったというのも真実である。文化程度の低い民族にあっては、老人や弱者を遺棄、或いは他の方法で殺戮するということは、ひろく行われた慣行であった。—そのことはよく知られている⁴⁾。しかし、そうした慣行があったということから直ちに、かの偉大な法律家(先のイェーリングのことか-訳者補足) がそう捉えたように、その民族は両親を愛し、また敬うことを知らなかった、と結論づけるのは決して正当ではなく、誤解である。

つまり、原始社会や未開社会にあって、人々が老人や弱者を遺棄し死に至らしめるといった慣行がひろく認められるとしても、そうした事象は、必ずしも、彼等にあっては両親に対する敬愛の情が欠如しているということを示すものではない。それは、或る社会において、墮胎の慣習が存在するからといって、そのことが直ちに、そのような民族、人々のあいだには子に対する親としての愛情が欠如しているとは言えないのとまったく同じことなのである。彼等は、凶作といった飢饉に襲われたとき、飢餓状態に迫られて、そのように扱わざるをえなかったのであり、また、戦争状態といった容赦のない窮状に迫られて、こうした行動に出ることを余儀なくされたのである。というのも、老人や弱者は、食糧のきわめて乏しい状況下で、その僅かな蓄えを無駄に消費する者と捉えられていたのであり、また、戦時にあっては足手まといになると考えられていたのである⁵⁾。もし、以下に述べるような状況がなかったとしたら、彼等に代って、彼等が現在、年老いた両親と親しく接しているように、当時においても老

いた両親に対して敬愛の情を示していたことであろう。つまり、もし、生き延びていくために原始的な争いを展開しなければならないという残酷かつ無慈悲な状況が、人間に固有の性質であり彼等にもまた備わっている憐憫の情を抑圧するといったことがなかったならば、また、そうした無慈悲で野蛮なことを為したがために起こる良心の呵責を慰めるために、そうした慣行に対する迷信的な理由付けを幾度もかつ幾様にも作り上げなければならなかったといった事情がなかったならば、当時の彼等にあっても現在と同じように親しく両親と接していたであろう。

或る種族なり人種が、親に対する孝行の念や両親への愛情において、他の種族なり人種と比べて欠如しているということがあったならば、その種族なり人種は、おそらくこの世の生存競争において、きっと真っ先に死滅するであろう⁶⁾。仮に、人類がその原始段階に於いて、親に対する孝行の念や両親への愛情をまったく欠いていたとしたならば、つまり、もし、当時の人々が、徹頭徹尾、利己主義(egoism)に基づく生活を送り、情愛や共感といったものと無縁な生涯であったとするならば、人類(human race)というものは、とっくの昔に死に絶えていただろうし、この世界は、狼や虎といった野獣が支配する世界となっていたであろう。

両親を敬う、尊重するといった感情が、子どもたちにとって、時には畏怖の念(awe)、つまり尊敬と恐怖の入り交じった感情に似たものを伴っている、ということは、実際、確かにそうであろう。しかしながら、その畏怖というものは、(その根本において- 訳者補足)愛情なのであって、決して恐怖の観念そのものではない。敬愛の情が畏怖する感情を引き起こすのである。中国の哲学者 Chu-his (朱熹) が、彼の著『家礼』(Book of House-Ceremonies) のなかで、祖先祭祀の起源を精確かつ手短かに、こう述べている。「祖先祭祀の目的は心底からの敬愛の情によって命じられる事柄すべてを果たす以外のなにものでもない」(凡祭主於盡愛敬之誠而已)。

他方、今は亡き栗田寛教授も、彼の著『祭礼私攷』(The Rituals of Worship. なお、穂積の原著では『祭典私攷』となっているが、明治28年に皇典講究所より出版された栗田寛の著書名は『祭礼私攷』である。一訳注)を、次のような文章で書き起こした。

「この世に生を授けられたひとのなかで、その両親を敬う気持ちを持たないひとがいるだろうか。また、両親を敬うひとにあって、一体、その祖先に畏敬の念を抱くことのないひとがいるだろうか。さらにまた、両親を敬い、その祖先に畏敬の念を抱くひとにあって、情愛の感情に突き動かされて、その霊 (spirits) に供物を捧げたいと思わないひとがいるだろうか。供物を捧げるということは、これこそまさに人間の本性に植え付けられた知性、知恵の働きの結果である。つまり、人間の本性によって、それに基づくがゆえに、神々の時代からずっと、靈魂のまゝに供物を捧げるという儀式が執り行われていたのである」。(ちなみに、上記『祭礼私攷』では、こう記されている。「世に生とし生る人、誰か父母を敬まふ心なからむ。父母を敬ふ人にして、誰か又我先祖を崇めざるものあらん、仮初にも父母を敬ひ、とほづ親を崇むる者、いかてかその靈祭に情を極め誠を尽さざらむや、その誠を尽すが、自然の天理なれば、神代の昔より、神魂を祭る礼儀もありけるにこそ」。同書、1頁。一訳注)。

栗田は、さらに続けて、こう述べる。

「両親に先立たれて、この世に残されたひとは誰でも、年月が過ぎ去るにつれてその胸内に深い悲しみを覚える。たとえば、春に花が咲き始める頃、夏になって草木が萌え出す頃、秋の夜に虫の音が聞こえる頃、そしてまた、冬になって露や霜が降りる頃、要するに、残された子どもたちの見るもの聞くものすべてが、悲しみの感情を引き起こし、両親が元気だったころの在りし日々を思いおこさせてしまう。つまり、亡くした両親を忘れることができないという思慕、追憶の感情が、その霊に飲食物を供えるという慣行をうんだのである。それ故、霊前に供物を捧げる慣習は、その起源を人間の本性 (human nature) に見出すことができる」。(ここでも上記、栗田の原文を引用する。「凡そ父母におくれたらん人ハ、年月のうつり変らふまにまに、花咲ををる春の山辺、木草繁れる夏のけはひ、虫の音すだく秋の夜、露霜落る冬のあした、見るもの聞ものにつけて、心を傷ましめざる事なし、その心をいたましむる毎に、父母のありし昔を思慕びつつ、其起居行状をも語りひ出て、忘るるに忍びざる、甚懇切なる情より、時々食膳を備へて、神魂を祭るは、人の常情なるを以て、神世の昔より、祭礼をば、定め給ひけむ」。同書、1-2頁。一訳注)

細川潤次郎男爵もまた、その著『祝祭日講話』(Lectures on National Festival Days) のなかで、国家(皇室)の祖先へ供物を捧げるために設けら

れた祝祭の起源を、先ほど述べたのと同様な仕方でも説明している。(細川潤次郎の『祝祭日講話』は、明治25年に求林堂より出版された。その「講話目録」目次は、「一月一日講話」「元始祭日講話」から始まり、紀元節や天長節など、九つの講話と付録として一つの講話が綴られている。一訳注)

祖先崇拜の起源を「靈魂の恐怖 (the dread of ghosts)」、それ故にまた「靈魂の慰撫 (ghostpropitiation)」に求める研究者や著述家たちは、靈魂には、恐れられるべき靈魂と尊ばれるべき靈魂との二種類があることを知らず、その区別をつけることができないのである。靈魂は、二種類に区別することができる。すなわち、恐怖の念を強いるものと、その反対に情愛や尊敬の念を起こさせるものである。かつてローマ人もまた、同様の区別をしていたように思われる。というのも、彼等は靈 (spirits) を二種類に区分して、それぞれに違った名前をつけていた。つまり、生靈 (Manes) が、敵意を帯びているときは怨靈・悪靈 (Larvae) と呼ばれ、それが優しく慈悲深いものであるときは守護神 (Lares) と呼んでいた⁷⁾。「死んで神にまつられた人間の靈魂は、ギリシア人が守靈ダイモンまたは神人ヘロスといったもので、ラテン人はこれに守護神ラーレス、生靈または精靈マネスの名をあたえた。アプレイウスによれば、『われらの祖先は、生靈が悪意を有するときは怨靈ラルヴ、好意を有し情ぶかいたときは守護靈とよばれると信じていた』とあり、また別の作家は『精靈と守護神とはおなじものである。われらの祖先はそう信じていた』とかいている。キケロにも、『ギリシア人が守靈と名づけるものを、われわれは守護神と呼ぶ』とある。フステル・ド・クーランジュ、田辺貞之助訳『古代都市』、白水社、1961年、54頁。一訳注)

敵軍や不自然な死を迎えたひとの靈は、前者つまり怨靈・悪靈 (Larvae) に属する。時折、彼等の靈に供儀が捧げられるのは、その靈を慰撫するためである。しかし、祖先の靈魂は、後者つまり守護神 (Lares) に属する。もちろん、守護神にも供物を捧げるのではあるが、それは、慰撫するためではなく、その靈を崇めるからであり、その子孫が祖靈に対して抱く情愛や尊敬の念のあらわれとして供物を捧げるのである。こうした慣行は、残された親族が、あの世に逝った親族にたいし、彼等がこの世で過ごした日々のように飲み物や食べ物、また衣服などを供したいという、その自然な衝動から湧き起こったのである。

孔子 (Confucius) は、彼の弟子たちが伝えるところによれば、祖先の靈魂

に向き合うにあたっては、あたかもその霊が、現在ここに生きて在るように事を運びなさい、と述べたという。「祭如在」⁸⁾。(『論語』巻第二 八佾第三。「祭ることいま在すが如くし」。金谷治『論語』、岩波文庫、1963年、44頁。また、「孔子が先祖を祭る時には先祖が我が前におるかのごとくに誠心をつくし」「祭は誠心を尽くすのが本であって、儀式は末である」。宇野哲人『論語新釈』、講談社学術文庫、1980年、73-74頁。一訳注)。また、この東洋の大哲人は、次のように述べている。「死者に対しては、あたかもまだ生きておられるかのように仕え、葬られたのちには、あたかもまだここに現存しているかのように仕えなさい。それが孝行の極意である。「事死如事生。事亡如事存。孝之至也」⁹⁾。(『中庸』第19章。「死というのは死んだばかりの時、亡は葬ってから以後のこと」「先王が死んでまだ葬らない時には、まるでまだ生きていられるかのように事え、亡すなわち葬られてしまっただけからは、まるで存在していられるかの如くに事える。このようなこそは孝の極致である」。島田虔次『大学・中庸(下)』中国古典選7、朝日新聞社、昭和53年、111-112頁。また、「死は新たに死するをいい、亡は葬って後をいう」「喪に居る時は死せる者に事うること生者に事うることがよくし、葬祭の時には亡じたる者に事うること生るの人に事うることがよくし、よく先王の志を継ぎその事を述べるので、かくのごときは実に孝の至である」。宇野哲人『中庸』、講談社学術文庫、1983年、110-113頁。一訳注)。

私たちは、祖先の年忌日の儀式をおこない、墓前に集い、花や飲食物を供え、線香を上げ、祖先の墓の前で手を合わせて拝む。私たちがそうすることは、まったくその思い出を追慕し、祖先に対する敬愛の情から出てくるものであって、そこには「恐怖」の観念など、微塵も入り込む余地はない。さらにいえば、私たちの国に残された記録や伝統のなかには、祖先の霊を慰めるといった観点から祖先が崇拜され祖先祭祀が執り行われた、といったことを想起させるものはひとつも存在しない。

西洋人が、何故、霊魂にかんして文明化の遅れた他の諸民族とはまったく異なった観念を抱くことになったのかということにかんして、私は少しも不思議に思うことはない。というのも、西洋人がこうした迷信的な慣習から解き放たれてからすでに長い時間が経過しており、遠い昔に彼等が祖先崇拜、祖先祭祀を実行していた時代から¹⁰⁾、今日までの時代があまりに距たっているからである。その結果、西洋人は、いわば、霊魂と馴染みが薄いのである。それ

故また、彼等が、靈魂をなにかぞっとするもの、恐ろしいものとみなすもの、或る意味では自然のなりゆきであるだろう。

かつて、私がロンドンに留学していた頃、私はライシヤム劇場 (the Lyceum Theatre) に行き、ヘンリー・アーヴィング (Henry Irving, 1838-1905. イギリスのヴィクトリア時代の舞台黄金期に活躍した俳優。彼は、1871年にライシヤム劇場の看板俳優となり、その後、同劇場の監督となる。1878年暮れからハムレットを演じ、大成功をおさめた、という。—訳注) の演じるハムレット (Hamlet) を観たことがあった (穂積は1876・明治9年から第2回文部省留学生としてイギリス留学している。1880・明治13年には「転国」し、ベルリン大学で学び、翌81年に帰国する。—訳注)。もちろん私は、この有名な俳優の演技に魅了された。しかし、亡霊が出てくる場面では、私は、もし日本人の役者であったなら、彼とは別の方法で演じたであろうという感覚に襲われた。アーヴィングによって演じられたハムレットは、私には、いつもびくびくしており、不安に苛まれ、畏れ戦く人物として映った。そうした表情をとる理由は、ハムレットの父親の亡霊によって語られた恐ろしい物語のせいばかりではない。—それだけが理由なら、ハムレットがそのように演じられるのも当然であろう。—が、亡霊そのもの、父親の靈魂に対する恐怖の念もまた、そうした表情をとらせているのである。(穂積はここで、『ハムレット』第1幕第4場、とくに第5場で、デンマーク王子ハムレットの父の亡霊が現れ、事の経緯を述べ「無残、非道にも殺された父の敵を討て」と息子ハムレットに語っている場面を指しているものと思われる。シェイクスピア、野島秀勝訳『ハムレット』岩波文庫、2002年、66頁参照。—訳注)。

ハムレットのこの場面を、もし日本人の役者が演じたとするならば、彼はきっと、父親の靈に対する敬愛の情を深く刻んで演じたことであろう。そして、その表情には、父親の運命に対する悲しみや哀れみの情、また「卑劣で極悪非道な殺害」に対する恐怖と怒りの感情が入り交じってあらわれることになる。日本人の役者ならば、あの有名なイギリスの俳優が演じたように幽霊、幻影 (the phantom) を払いのけ避けるのではなく、父親の亡霊を抱きすくめたことであろう。

もちろん、私は、シェイクスピアのこの有名な劇を演出するにあたっては、この方法がもっとも正当なものだと言おうとしているのでは決してない。さらにまた、私は、アーヴィングの俳優としての技量を十分に承知しているなどと

思っているわけでもない。ここでは、ただ私の受けた印象を述べているにすぎない。日本の演劇において、幽霊が出てくる場面は、決して珍しいわけではない。そして、幽霊が、両親や息子、娘たち、友人や愛する人々の前に現れるとき、その亡霊に出会ったこれらの人々は、決して恐怖の表情をあらわすのではなく、出会えたことに対する喜びの表情を示すのである。もちろんそこには、その亡霊の運命に対する悲しみや哀れみの情が混じっていたとしても、それでも喜びの感情をあらわすものである。

この著の初版が刊行された後、人類学の分野で世界的な権威のひとりと目されている人物が、祖先崇拜というこの主題にかんして、私と同じような見解をもっていることを知り、私はたいへん嬉しく思う。タイラー博士 (Sir Edward Burnett Tylor, 1832-1917. イギリスの人類学者、民俗学者。彼は「現在の未開の民族中にわれわれ文明人の先祖が通過した太古の文化要素の残存を認め、これによって人類文化史を再構成しようと試みた」という。『岩波 西洋人名辞典 増補版』1981年。一訳注)は、こう述べている。「ひとが死を予期するうえで、また病人や老人との接し方にとっても、たいへん幸せなことに、祖霊として祀られる諸々の観念の中で、恐怖や憎しみの念が主要になることはない。祖先の霊は、概して穏やかな後援者として、少なくともその霊の親戚や崇拜者に対しては優しい守護者と考えられているのである」¹⁾。

「靈魂の恐怖」そこからくる「靈魂の慰撫」といった理論は、祖先崇拜、祖先祭祀にかんする限り、まったく不自然であるように思われる。「靈魂の愛」という表現が、どれほど西洋人の耳には奇妙に聞こえようが、私には、この理論が真実により近いものと思われる。靈魂の愛、それへの追慕が、祖先崇拜、祖先祭祀という慣習を人類にもたらしたのである。

原注

- 1) Herbert Spencer, *Principles of Sociology*, I, § § 146, 147, 206.
- 2) Lubbock, *Origin of Civilization*, 5th ed., p. 322.
- 3) Ihering, *Vorgeschichte der Indoeuropäer*, S. 59. (translated into

English by Drucker under the title of *The Evolution of the Aryan*, § 13.) .

- 4) See Hartwell Jones, *The Dawn of European Civilization*, ch. xiv; also the present author' s work 隠居論 (*On the Abdication of the House-headship*) .
- 5) Hartwell Jones, *loc. cit.*, ch. xiv.
- 6) E. T. Seton, *The Natural History of the Ten Commandments*, pp. 7-11.
- 7) Fustel de Coulanges, *La Cité Antique*, liv. I, ch. ii.
- 8) 論語 (The Analects of Confucius.)
- 9) 中庸 (The Doctrine of the Mean.)
- 10) W. E. Hearn, *Aryan Household*, ch. ii, § 2; Tylor, *Primitive Culture, II, ch. xiv*; Spencer, *Principles of Sociology*, I, § 152.
- 11) Tylor, *Primitive Culture*, II, ch. xiv. 同じ著者による次の一節も参照されたし。「生きている尊属に対する尊敬の念が敬慕、崇拜へと推移し、祖霊となっていく」。(Tylor, *Anthropology*, p. 410.)

第2章 社会生活の起源としての祖先崇拜

人類が同種同質の社会生活を営むことができるようにという目的のもと、彼等を結びつけた絆とは、一体何であったのだろうか。現在、人間社会においては、一致協力して或る共通の目的 (some common end) を達成するという意図のもとで、種々の集団 (communities) を組織する傾向が明らかに見受けられる。或る人々は、共通の信条を支持し広めるために宗教団体を設立する。また或る人々は、共通の知識を習得するために學術団体を創設する。さらには、お互いの利益を得るために商事会社を立ち上げる人々もいる。一方ではまた、彼等の特定の政治的信念を承認してもらうために諸々の政党を結成し、動き出す集団もいる。そうした社会集団の数は、確かに増加しており、そうした集団のもつ影響力は、文明の進展とともにますます増していき、広い範囲に及んでいる。ひとは、生活のあらゆる場面において、協力することの長所、強み、また、団体を形成することによって生じる便益に気づき、それが日々、ますます拡がっている。こうした社会集団の範囲は、国境や人種の違いをも超えていく傾向を示すようになってきている。そして、或る一定の文化の進んだ人々のこうした集団内部にあっては、つねに、その集団の絆を形作る或る特定の自覚的目的 (certain conscious aims) が見出されるのである。

しかし、原始社会の人々にあっては、お互いが結びつくことによって生じる利点に

ついて無知であった。さらには、社会を形成し維持していくうえで本質的に必要な、先に記した諸々の価値や徳目が、彼等のあいだでは未だ発達していなかった。したがって、原始社会の人々にとって、集団を形成する絆の端緒は、或る無意識の力 (some unconscious force) に求められなければならなかった。そして、この無意識の力は、血族の結びつき (the ties of consanguinity) にその起源がある。それは、少しも疑うことができない。同じ母親から生まれ、同じ母親によって育てられた子どもたちが共に暮らすということは、ごく自然なことである。子どもたちが成長すると、彼等は狩猟のため共に森へ出かけ、彼等の共通の敵と戦うため共に戦場に赴き、彼等の血族が殺害されると復讐し、食物や衣服、また住居を得るために互いに助け合う。このように共に活動する兄弟姉妹の子どもたちもまた、同じような行動をとり、その次の世代も、おそらく前世代がとった暮らし方を踏襲していく。このように、ひとが社会集団を作るにあたって基本となるもっとも自然な成り行きは、血族の結びつき (unity of blood) である。

しかしまた、血族間の情愛の深さは、おのずからその範囲、程度に限界がある。というのも、第一世代の社会集団、つまり兄弟姉妹から成る集団であり、もし彼等の親が存命であればもちろん親もそこに含まれるこの第一世代の社会集団は、もっとも緊密な一団であるだろう。その一団は、兄弟らしい、また姉妹らしい愛情にもとづく強い絆によって、互いに固く結びついている。しかし、従兄弟を含む次世代、次の集団になると、第一世代の集団と比較して緩やかな一団となってくる。というのも、この第二世代の集団にあっては、愛情や共感にもとづく絆が、第一世代の兄弟姉妹間のそれよりも強くないからである。ましてや、次の第三世代にいたっては、さらに緩やかな一団となってくるだろう。つまり、血族の度合いが遠くなる、遠縁になるにつれて、また、血族の人数が増えていくにつれて、血族関係の義理、情義の感情は、段々と薄れていく。それゆえ、縁遠くなった親類縁者を互いに引き寄せ、彼等をひとつの集団 (a community) に結びつける求心力として作動する或る要素 (some other factor) が存在したにちがいない。この要素、動因こそ、祖先崇拜、祖先祭祀であった。

共通の祖先を崇拜すること、また、それに伴う諸々の儀式を執り行うことは、遠く分散した大勢の血族のあいだに、共通の血統であること、出自が同じであること

の記憶を蘇らせる。多人数となった彼等は、日常、互いに遠く離れて暮らしており、それゆえ、この連結、つなぎ(link) がなければ、彼等は、一族としての交流を失ってしまったであろう。原始社会の人々にあつて、元々、集団を形成する唯一の絆であったことを示す血族としての感情は、絶えず増えていく一族の生活の場が互いに遠く隔てられることによって、段々と薄くなっていく。そのように一族としての紐帯が緩くなるにつれて、あるいは、緩くなっていくがゆえに、種々に枝分かれした血縁の様々な集団を、共通の先祖を祀ることによって互いに結合させることは、より一層必要となってくるのである。それに因つて、原始的な集団が、(互いに争うことなく-訳者補足) 同種同質の社会へと発展をとげることとなった。

さて、もし集団を形成する第一の絆が血の結びつきであつたとするならば、また、この血族の絆が、情愛と共感を遠く距つた親族のもとへも差し伸べ、及ぼすことを意味するならば、祖先崇拜、祖先祭祀の起源にかんして先に述べた私の説明、解釈は、「靈魂の恐怖」また「靈魂の慰撫」理論よりも、祖先崇拜というこの慣行が起こつた目的、意図を、しっかりと捉えているように思われる。

祖先崇拜、祖先祭祀というもののが普遍的な制度なのかどうか、即ち、人類のすべての種族が必ずやいづれかの時代において、祖先崇拜、祖先祭祀という時期を経てきたか、或いは歴史的にその段階を経験せざるをえなかつたものなのかどうか、という問いは、軽々しく解答が見つげ出せるような問いではない。そうではあるが、人類が、現在我々が暮らす社会的また政治的状況にどのように到達することができたのかと考えるさい、私には、人類は、先ず初めに祖先崇拜、祖先祭祀を経験したからこそ現在の状況が現れたのであり、歴史の原初段階でその影響を受けなかつたとするならば、現在の段階を想像することはできないのである。

先にも触れたタイラー博士は、こう述べている。「祖霊崇拜 (Manes-worship) は、これまで人類史に現れた多々ある宗教のなかでも、その大きな部門を占めるひとつである。祖霊崇拜の諸原理を理解することは、それほど難しいわけではない。というのも、その原理は、明白に現代世界の社会関係のなかに持続しているからである」¹⁾。

また、ヘンリー・メイン (Sir Henry Maine, 1822-1888. イギリスの法学者。彼は 1861 年に著した『古代法』で、原始法から近代法への発展過程を分析して文明の起源を探究した。この著

は歴史法学の古典的著作と目されている。一訳注)も、祖先崇拜は、人間世界の数多くの地域で、今なお一般的に実践されている宗教である、と断言する²⁾。クーランジュ (Fustel de Coulanges, 1830-1889. フランスの歴史学者。古代ギリシアやローマの諸都市と宗教との関係を明らかにした。彼が1864年に著した『古代都市』は、中川善之助によって「正に近代社会諸科学の黎明期を成した名著である」といわれている。一訳注)によれば、祖先崇拜、祖先祭祀の慣習はギリシアやローマ世界においても存在していた、という³⁾。また、ハーゲン博士 (Dr. William Edward Hearn, 1826-1888. アイルランド生まれの経済学者。アダム・スミスの古典派経済学に対抗した。彼の著に、牧禄二郎訳『英国議院行政節制権論』明治24年刊がある。一訳注)は、アーリア人 (Aryans) もかつては祖先崇拜、祖先祭祀を信奉する人種であったことを証明した⁴⁾。

さらにまた、歴史学者や社会学者⁵⁾の最近の調査結果、ならびに未だ文明化されていない未開社会の人々の習俗や慣習を記録した旅行者たちの報告書のほとんどが、亡くなった祖先の霊を崇拜すること、祀ることが、大多数の人種間で実践されていることを立証している。このような現在の研究成果から、以下のような結論を導き出すことができるように思われる。つまり、すべての人種が、歴史の発展段階の初期において、祖先崇拜、祖先祭祀を実践していたこと、また、こうした習俗や慣行が、その後の歴史の進展に伴い幅広い基礎のうえに社会生活が築かれていくその第一段階であったということ。—そう論じて構わないように思われる。

原注

- 1) Tylor, *Primitive Culture*, II, ch. xiv.
- 2) Maine, *Early Law and Custom*, ch. iii.
- 3) F. de Coulanges, *La Cité Antique*.
- 4) Hearn, *Aryan Household*.
- 5) とりわけ、次の文献を参照せよ。Dr. Steinmetz's *Ethnologische Studien zur Ersten Entwicklung der Strafe*.